

## 祭文 奉上

ここ岩洲山の麓、山口護国神社境内に於いて、生野義挙一五〇年墓前祭祀を執行するに当たり「義志関係者」を始め多数の来拝の方々をいただき誠に感慨深いものが有ります。一五〇年の星霜を経て歴史に残る志士の諸霊を慰めその遺功を顕彰し祭文といたします。

慶応三年十二月朝廷の王政復古により江戸幕府は二百六十余年の歴史に幕を閉じた。かねがね山口村民が懇願していた志士の慰霊をこの時生野代官所裏地からこの境内に埋葬し祭祀をおこなった。年明けて慶応四年に京都から山陰鎮撫総督として但馬に来た西園寺公望が生野義挙に殉じた志士の霊を顕彰すべくこの「殉節忠士之墓」の墓碑を建立。続いて参謀であった折田年秀が「殉節忠士之墓誌銘」撰文のこの碑を建立し、引続き石碑招魂祭を行い、これが最初の招魂祭となった。この一對の石碑は養父郡大屋村産出の緑色を帯びた「蛇紋岩」で鉉物のマグネシウムを多量に含む温石と言い先人たちは暖房に利用したと言う。生野義挙熱血志士たちにふさわしい石碑と言えましよう。

石材の選定、調達、石細工とその運搬には延五〇〇人の大屋村の住民、山口村の住民などが関わって造立されたと記録に残されている。以来招魂社として、明治三年の「七年祭」明治二十五年の「三十年祭」には、初代司法大臣であった「山田顕義」が自決した志士の親類にあたりここ墓地に参拝し、視察した生野鉉山で亡くなる。生野が終焉の地となった。大正三年の「五十年祭」には生野義挙同志の一人「原六郎」が参拝し墓碑の前で『はからずも世にながらえて、国のため、たおれし友をまつる今日かな』と詠んだ「七十年祭」「百年祭」そして平成五年の「一三〇年祭」本日ここに一五〇年の墓前祭を実行し志士の「みたま」を慰霊し、永代に渡り祭祀を継承していくことを祈念するものである。

かつて、幕末激動の時代、草莽の若き志士たちが命をかけて王政復古に立ち上がった。尊王攘夷の大義のもとに燃ゆる憂国の精神で新しい国づくりに行動を起こし維新の先駆をなした志士たち。

明治維新という大偉業が如何に多くの志士たちの人命の犠牲の上に成り立っていたか。いかに国家のために尽くして来たか。この地に眠る生野義挙殉難の志士たちの信念と生きざまに深い思いを心に刻み鎮魂の祈りとしたい。

終わりにかつて歌い続けてきた慰霊の歌を奉げます。

『正義のために、身を捨てし

ほまれは朽ちぬ岩洲山、山より高き大君の

めぐみわするな、わが友よ』

平成二十五年十一月二十四日

生野義挙百五十年墓前祭実行委員会

委員長 青田 昌